

堀明 Akira Hirai

# 走るといふ犬本来の美しさを プロの技で最大限に引き出した。



写真1



動物研究者としての顔を持つ写真家の堀明は、国内外でさまざまな動物の写真を撮影し、「週刊文春」や「日経サイエンス」などで発表してきた。

写真1は、堀が2000年代に1年半にわたり八ヶ岳の牧場に暮らし、「半放し飼いの状態」の127匹の犬たちの群れの生態を観察・記録していた折に撮影した。新雪の八ヶ岳山麓を駆け抜ける4頭のゴールデンレトリバーの、迫力ある写真だ。雪面に置いたカメラバッグの上にカメラを固定し、別の人がボールを投げてもらい犬が追うところを、ローアングルから狙って

シャッターを切ったのだという。

「レトリバーは、撃ち落された鳥を回収するために作出された犬。犬という動物は、獲物を追いかけて追い詰めるのが本来の姿で、その美しさを引き出すことを狙った」と話す。

写真2は、八ヶ岳の夏。たまたま飼い主に連れられたビーグル犬に出会い、撮影したものだ。ビーグル犬は長い耳が特徴の猟犬。その耳が跳ね上がる瞬間を狙った。

どちらの写真にも、画面には必要最低限の要素しか写っていない。写真1は雪原が画面のほとんどを占め、木陰が写る写真2に木そ

のものは入っていない。印象的な作品を作るうえで、「自分がちょっと移動して画面を整理することも大切」と言う。

撮っている動物の8割はイヌ科かネコ科だという堀。走る犬の魅力を問うと、「犬は人と遊ぶ動物。犬は、一緒に遊ぶことで人を自然に引き戻してくれる。人が楽しんでいると、その気持ちが伝わって犬もうれしそうになる。犬は気持ちを察する動物だから」

どちらの写真も、無心で走る犬の姿が愛らしく美しい。それは、その犬の生態に沿った本来の姿を見ているからなのだ。

**DATA**

写真1:12月ごろに撮影。新雪なので、犬が躍った雪が高く跳ね上がる。躍動感を伝えるタイミングを狙うことも大事。

カメラ	キヤノンEOS3
レンズ	EF100-400 F4.5-5.6
絞り	F5.6 絞り優先モード
シャッター速度	1/1000秒
ISO感度	100
補正	+1

写真2:ビーグル犬のチャームポイントは大きな目にもある。光の中に飛び込んできた瞬間を撮ることで、目に陽光が反射し愛らしさが増した。

カメラ	キヤノンEOS3
レンズ	EF28-135 F3.5-5.6
絞り	F3.5 絞り優先モード
シャッター速度	1/250秒
ISO感度	100
補正	+2/3

**堀明**

ほりあきら  
1959年生まれ、京都府出身。法政大学法学部を卒業後、新聞記者などを経て動物写真家になる。2001年、ペンガルトラを追ってインドで行ったのべ6月に渡る撮影記を、翌年「日経サイエンス」に発表したのがデビュー。ヨーロッパ、インド、東南アジア、沖縄、八ヶ岳などで撮った旅と動物の写真を発表している。作家・ジャーナリスト・動物研究者でもある。

<http://www.es-project.net/panthera/>



写真集  
「犬の詩」  
土屋書店  
1680円(税込)



新書  
「犬は「しつけ」でハカになる」  
光文社新書  
777円(税込)

